慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヤーコプ・ヴィンプフェリング(上)
Sub Title	Jakob Wimpfeling (1)
Author	尾崎, 盛景(Ozaki, Morikage)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.43, (1982. 12) ,p.233- 250
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塚越敏教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00430001-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヤーコプ・ヴィンプフェリング（上）

尾崎盛景

一　フライブルク時代まで

ヴィンプフェリング（Wimpfeling）家は下エルザスのブルーマット（Brumat od. Brumath）の農民階級の出である。父のニーコラウス・ヴィンプフェリング（Nikolaus Wimpfeling）はシュレットシュタット（Schlettstadt 現在は仏領 Sélestat）の市民で馬具師であった。長兄のヨーハン（Johann）もその地で蹄鉄職人として働き、後にモールスハイム（Molsheim）近郊のズルッ（Sulz）に移った。そこで牧師をしていた次兄のウルリヒ（Ulrich）の勧めによったのかもしれない。もう一人の兄はシュトラースブルク（Straßburg 現在は仏領 Strasbourg）で庭師をしていた。ニーコラウスはラッポルツヴァイラー（Rappoltsweiler）近郊の聖ピルト（St. Pilt）出のカタリーナ・ブレーガー（Katharina Bleger）と結婚した。彼らの三人の子供のうちヨハネス（Johannes）は父の仕事を継いだが、一五〇九年初めに死んだ。長女のマクダレーナ（Magdalena）はパン屋の親方と結婚したが、若くして未亡人になり、後に再婚し、ヴィンプフェリングの晩年には病弱の兄の面倒をよくみた。ヤーコプ・ヴィンプフェリング（Jakob Wimpfeling）は一四五〇年六月二五日に生まれたが、身体が弱かったため早くから僧職につくことに決められていたのかもしれない。彼は胸も弱

く、声も細く、特に後には持病の痛風と結石病には生涯苦しめられた。

ヤーコプは最初の教育は故郷で受けた。「新敬虔派」(Devotio moderna) の人々の集った優れたラテン語学校はよい学問的基礎を与え、彼の将来を決定したといってよい。ヴェストファーレンのルードヴィヒ・ドリンゲンベルク(Ludwig Dringenberg) が一四四一年以来そのラテン語学校の教育指導を引き受けていた。彼は学問の意欲に燃えていたが、家庭が貧しかったため憧れのイタリアに行くことができなかった。当時ハイデルベルクに学んでいたが、彼を慕うシュレットシュタット出の学生たちが、彼らの故郷にドリンゲルベルクを招いたのである。彼とその後継者たちはラテン語教育の形式的文法主義を排し、規則や退屈な語源穿鑿よりも講読を強調するものであった。未だ創設されて間もないこの学校のためにシュレットシュタットが上エルザスの中でも最も勝れた教育の地として声価を高めたのはこの謙虚な教育者のお陰であった。ヴィンプフェリングは師に対する感謝のことばを次のように述べている。「使徒のごとくに青年教育に献身したこの遍歴のヴェストファーレンの人にエルザスはその教育の大部分を負っている。」更に到る処で倫理的な面が強調され、誠実で敬虔で、信仰と道義に基づいた人生観に貫かれた真面目な教育者はその弟子たちをいわゆる全人に仕上げようと努力した。ヴィンプフェリングはドリンゲンベルクによって「ドナートゥスやアレクサンドロスの文法に付せられた傍注や注釈をたたきこまれずに」教育されたことを感謝し、また誇りとした。特にドリンゲンベルクが祖国の歴史に注目したことが若いヴィンプフェリングに強い影響を及ぼしたことは忘れることができない。彼がドイツ的性格をエルザスの民衆の中から吸い取ったということもあり得るとしても、教室から得たことも多かったのではないか。

ラテン語学校を卒業する前に、一四六三年五月二日に父が亡くなったが、伯父のウルリヒが面倒を見てくれ、フライブルク(Freiburg im Bresgau) に新設された大学で学業を続けることができた。一四六四年一〇月三一日に入学の手続

きを取り、伯父の勧めで当時の学長キーリアーン・ヴォルフ（Kilian Wolf）の家に下宿した。ヴォルフの影響はさして大きくはなかったが、法学のコンラート・シュルツェル（Konrad Stürzel）には生涯尊敬を棒げ、また同郷の先輩ガイラー・フォン・カイザースベルク（Geiler von Kaisersberg）は教師として、また人間的模範として最も感動し、彼との深い友交は終生変ることがなかった。しかしこの最初のフライブルク滞在はヴィンプフェリングにとって学問的にも精神的にも特に重要な意味を持ったとは思えない。人文主義的な学問はまだ創立されて間もない大学では生成の過程にあり、昔ながらのスコラ的な教育が当分の間続けられていた。一方神経質で臆病な青年ヴィンプフェリングは、常に荒んだ生活に陥入りそうな不安があり、そうした罪深い道に入る危険を注意してくれる師がいないことを歎いている。それでも一四六六年一一月二三日には学芸学士（Baccalaureus artium）の学位をとることができた。しかし二年後にはペストが流行し、他の学生たちとともにその町を去ることになる。

その後彼は親しい友人たちの勧めで、当時大学としては評価の高かったエアフルト（Erfurt）大学に移った。その当時のことについては全くといってよい程何も知られていない。しかし後の時代のことから考えると、そこでもかなりの成果を収め、特にラテン語の進歩には著しいものがあったようである。しかし彼の後の「罪を犯すなかれ。神の照覧あればなり」という告白のように、当時のどこの大学にも見られる学生生活を顧慮すれば、当時のヴィプフェリングの生活が必ずしもすべて正しい方向にあったとは言い切れない。彼も道徳的浄化と変化が行われたと告白している。しかしその内容がどういうものであったかは分らない。その頃伯父のウルリヒから手紙があり、しばらくズルツに滞在したのも、あるいはそのような事情があったのかもしれないが、とにかく将来の学業を続けるための経済的な問題が話し合われ、その結果伯父の費用で再びエアフルトで学業を続けることになった。

しかしそこで思わぬ事件が発生し、エアフルト行がハイデルベルクに変わってしまった。

二　ハイデルベルク時代

エアフルトへの帰路、彼はシュパイアーで急病に罹かり――恐らく後の持病になった痛風の発作であったろう――一四六九年の秋の終りから冬までそこに留らなければならなかった。呼ばれたシュパイアーの医師の手には負えず「幸か不幸か、あるいはそれよりも神慮によって」偶々居合わせた見知らぬ人の世話で、当時評判の高かった医師たちのいるハイデルベルクへ赴き、そこで治療を受けることになった。船と馬車でシュパイアーから南に向かったが、直接ハイデルベルクに行ったのではなく、まずシュトラースブルクに、そして故郷のシュレットシュタットに立寄った。ハイデルベルクではすっかり健康を取り戻すことができた。病気その他で大変な費用がかかり将来が思いやられたが、また伯父が救ってくれた。伯父のヴィンプフェリングにかける期待はよほど大きかったたものと思われる。伯父はかつて自分が学んだハイデルベルクで甥が学業を続けることを許し、新たに下宿代まで援助してくれることを約束した。ヴィンプフェリングは多くの友人たちの勧めでハイデルベルク大学に入学することになった。一四六九年一二月二日のことである。

ハイデルベルク大学では、当時のどこの大学とも同じように「実在論者」と「唯名論者」との相克対立はあったが、選帝侯フリードリヒ一世（Friedrich I.）の配慮で大学の機構の中に新しい秩序が立てられていた。学芸学部では両派の代表者たちが教授会に参加することができた。しかしフマニスムスの流れは未だ強く感じ取られなかった。ヴィンプフェリングの甥にあたるヤーコプ・シュピーゲル（Jakob Spiegel）は「彼ら――ハイデルベルクの教授たち――は古典古代の文学について何も知らない。ただ雄弁術だけは勝れていた」と言っている。水準を抜いた勝れた学生たちもいた

が、一般学生の自由放任で野放図な生活や態度には真面目なヴィンプェリングはついてゆけなかったようだ。彼は先ず哲学科に進み、一四七〇年一月八日には学芸学士に、翌年の三月一日には得業士、一九日にはマギステルになり、上級学部への道が開かれた。

彼は始め教会法の研究に進んだが、二年後にはそれを放棄した。この専攻分野の動きが呕吐を催すほど嫌になり、弁護士を始めとし、それに関連することすべてのことが彼の性格に合わないことが分かって来た。「私が見るところ、テキストにも注釈にも、ほとんど神について、天使について、人間の心と力について、必要な道徳について、人生について、救世主の苦しみと死について何も書かれていない。ただ選挙について、聖職録と地位について、訴訟と裁判について、告訴と弁護士について、訴訟の際の果てしない煩労について、同様に裁判上の果てしない煩雑な手続きについて、懐は暖かくすることはできようが私の性格からすれば身震いするようなことばかり書かれていた。(中略)たとえ天下を手に入れようとも、それが人間にとって何の役に立つであろう」といっている。

彼の決心は固まり、神学に身を捧げようと思った。それがまたズルッにいる伯父の意にも添うものであったからである。彼は神学を学びながら、「学びつつ教える」という当時の習慣に従って一方では学芸学部で教鞭を取った。当時の師としてはシュテファン・ヘースト (Stephan Haest) とパラス・シュパンゲル (Pallas Spangel) がいるが、彼らを父の様に尊敬し、また友人として生涯に亘って信義を尽くした。彼は神学の道を選んだことを誇りとし、「この研究によって私は他の多くのものも得ることができた」と後にも語っている。

一四七〇年頃に作られた詩が二つある。一つはプファルツ伯フィーリプ (Philipp) を称えたものであり、もう一つは選帝侯フリードリヒ二世に愛された女性クラーラ (Klara) を讃美したものであるが、前者は若いヒューマニストたちの

間によく見られる美辞麗句が目立ち、後者は果たしてその女性が真にその讃美に価するかどうかを疑わしめる作品である。故郷に関するものとしてはハーゲンバッハの運命を扱った対話体の長詩がある。これはペーター・ハーゲンバッハ(Peter Hagenbach)の処刑(一四七四年五月九日)後間もなく出来たものである。ペーターはブルゴーニュ公シャルル勇胆公(Charles de le Jémeraire)に仕える残虐な代官で、上エルザスの民衆を苦しめ、その悪業は長い間人々の語り草になっていた。その悪逆無道ぶりはヴィンプフェリングの脳裏にもまざまざと残り、生き生きとした自然描写とともに、その直接的感情が行間に溢れている。軽快なスタイルと流麗な言語によって、ヴィンプフェリングの勝れた詩的試みの一つといえる。同時にペーターの所業がすべてシャルル公自身の命令に従って行われたにすぎないとする代官自身の発言によって、攻撃の矛先は勇胆公、ブルゴーニュ、更にフランスへと向けられる。ここで始めて神聖ローマ帝国の統一と永遠と神性というヴィンプフェリング一流の理念が目を覚ます。この考えは後の「ゲルマーニア」に到るまで長く続くものなのである。ハーゲンバッハについての詩に関連してムルテン(Multen)の戦いも若い詩人の血を湧かせ、感動の筆を執らせた。ここでもヴィンプフェリングによって憎まれたシャルル勇胆公が一役を買い、全詩にはドイツ魂とエルザス精神が滔々と流れている。一四七六年一二月に選帝侯フリードリヒ一世が没すると早速弔歌を捧げ、同年新しく選帝侯に選ばれたフィーリプ誠実公(Philipp der Aufrichtige)にも讃歌を捧げた。またハイデルベルクを襲ったペストを主題にした哀歌がある。総じてヴィンプフェリングは決して偉大な詩人、否、或る程度の才ある詩人とすらいえないかもしれない。いたるところに無意味な美辞麗句を連ね、形式への無駄な格闘の跡も随所に伺える。要するに彼は心で作る詩人ではなく、頭で作る詩人であった。それは当時のどの若いヒューマニストにも見られることであるが、その中でも彼が幾分なりとも抜きんでているのは、新しいフマニスムスの息吹に彼なりに感動し、その研究に人一倍の

努力を払った賜物といえるよう。

この時代の最後を飾るものとしては二つの詩があるが、いずれも新しく大学総長に選ばれたヨーハン・フォン・ダールベルク(Johann von Dalberg)に直接関係のあるもので、ヴィンプフェリングがヨーハンとヒューマニストたちのサークルに近かったことを示している。ヨーハンは大学の改善に意欲を示し、また芸術を愛好するヒューマニストであった。彼に感激したヴィンプフェングは彼の求めるがままにヴォルムスの司教ラインハルト・フォン・ジッキンゲン(Reinhard von Sickingen)の死を悼む哀悼の詩をものした。更に同年(一四八二年)には新しくヴォルムスの司教に選ばれたダールベルク自身のために二行詩(Distichon)による讃歌を捧げた。

上述の詩的作品の他に、彼には教育者として折に触れ行ったいくつかの演説や講演があり、これらは年毎に詩活動よりも重要性を帯びて来る。一四七七年四月一五日にヴォルムスで聖職者を前にして行った演説では僧侶階級のエートスを問題にしている。僧侶の使命は大きいこと。国王も諸侯も皇帝でさえもその力と名誉においては一介の僧にも及ばない。その使命が大きければ大きい程責任も重く、それ故に僧侶は汚れのない手で神の仕事に携わり、人格においても民衆の模範とならなければならないと説く。それにも拘らずしばしば賭事や情事、華美な服装や贅沢な宣会などに明け暮れている僧侶たちの乱脈を批判することも忘れない。一四七八年のある神学得業士の学位授与式の式辞では、余りに早く専門の学問に入ることを戒め、基礎学問の重要性を示唆し、その後に初めて高度の学問に進むべきであること勧める。ラテン語文法の重要性、何よりも先ず論理学と討論術を学ぶべきこと。哲学を讃美し、それを軽蔑するものは「ろばであり、いつまで経ってもろばの域をでない」というような言葉が見える。ここにはまた既に彼の教育理想がはっきりと現われている。「堅忍不抜」(Beständigkeit)と「均斉」(Gleichmaß)——これは彼自身すら生涯守り得なかった時

代の要求でもあった――が教養発展の土台となるべきこと、「中道」(der goldene Weg) こそ人生の指針であり、神の示された境界を越えた「傲慢」(Hybris)は危険であることを指摘している。

一四七九年から一四八一年までにヴィンプフェリングは学芸学部の理事長（一四七九年）、学部長（同年）、教授団長（一四八一年）を歴任し、一四八一年一二月から一四八二年六月までは学長をも務めた。一四八二年五月二六日の精霊降臨祭の日に精霊教会で行った「精霊について(Oratio de sancto spiritu)」という講演はわれわれの興味を引く。それは勿論その祝祭日の意義を説いたものではあるが、それよりも主題を離れたところに当時の大学生活や僧侶階級の生きざまを見て取ることができるからである。まず学生組合や教授団の間の競争がある。そこは当時の大学を支配していた実在論者と唯名論者の恰好な闘争場裡になっていた。教師による学生たちの奪い合い、憎しみと敵意が学問の世界に広がり、学外の人々の面前でさえも口ぎたなく罵り合う場面しばしばあった。人格識見ともに勝れた人々がアカデミックな名誉から外され、思いがけない人物が「誓約」を無視して抜擢されて地位や学位を手に入れたりする。下らない猜疑や嫉妬。若者どもは毎日毎日勝手気儘に遊び回り、ただ時間を浪費しては学校の名誉を傷つけ、終には両親が苦労して稼いだ金を使い果たしてしまう。それをまた両親が黙って放任しておく仕末だ。軽佻浮薄な能度、言葉、服装、粧し込んだヘヤースタイル、恰好をつけた歩きっぷり、夜中の蛮声、昼間の狼藉、樹木をやたらに傷つけたり折ったり。それなどはまだいい方で、賭事、女遊び、暴飲暴食、いかがわしい宴会、それらは歌にまで歌われている。学生たちは剣客や騎士や兵士のように物騒なものを持ち歩き、夜になると罪も無い市民たちに襲いかかり、兎角の噂のある家に出入りしては食い荒しは教会や神の言葉など一向耳にしようとしない。いったい何の為に大学へ行っているのだろう。そんなことなら村の小学校でも学ぶことはできるだろう。「ほんの一寸勉強しただけで僧房に入れば精霊が得られるなどと思

うのはとんだ間違いだ」などという僧侶に対する辛辣な批判もある。しかし聖職者については現世欲、華美虐飾、贅沢三昧、暖衣飽食などの抽象的な批判があるだけなのは彼らにやはり一目を置いているのであろうか。

学長の任期中ローマ教皇に対する立場を証明する事件があった。大司教アンドレーアス・フォン・クラーニア（Andreas von Krania）がバーゼルの一般公会議を支持し、教皇ジクストゥス四世（Sixtus 4.）と枢機卿とを激しく批判した。ヴィンプフェリングは職掌柄ではあるがアンドレーアスに文書を送り、その中で大司教の攻撃を退け、ハイデルベルク大学教授団の賛成を得てヴォルムスに赴きその誹謗文を棄却した。彼は教皇庁や教会の全てを是認したわけではなかったが、その批判にはやはり限界があった。逆にいえば生涯に亘って両者に対して極めて忠実な信奉者であった。

ヴィンプフェリングに特別勝れた文学的才能があったとは思えないが、喜劇の方面で比較的成功した作品がある。それが今日ドイツの最初のラテン語喜劇として認められている「シュテュルフォー」Stylpho である。これある故にヴィンプフェリングはドイツ文学史にその名を留めているといってもよいかもしれない。一四八〇年三月八日、当時彼は学芸学部の学部長をしていたが、十六人の学芸学士に得業士の学位を授与した。その時彼は伝統的な祝辞の代りに「シュテュルフォー」を朗読したのである。あるいは学生たちに朗読させたのかもしれないともいわれている。このような趣向を変えた新しい試みの中にルネサンス精神の片鱗を見ることも可能であろう。この喜劇は彼がテキストとして推薦していたテレンティウス（Publius Terentius Afer）の手法をもって書かれ、またシュテュルフォーという名前も事実このローマの喜劇作家の「フォルミオー」Phormio の中から取られている。しかし原典との直接の関係は不明である。有力な手蔓によって苦労せずに聖職録を手に入れようとする品性の賤しいこのシュテュルフォーと、彼の友人であり、大学で刻苦勉励して将来は司祭あるいは民衆説教家になろうとするヴィンケンティウス（Vincentius）という二人の若

い僧の対立によって話の筋は進められてゆく。後者は強い意志を貫き司教にまで出世するが、シュテュルフォーはその無能であることが暴露され、豚飼いになることで満足しなければならない。多くのドイツの学生が訪れたイタリアでは以前から古典或いは近代のラテン語の喜劇が大学で上演されたことがあった。それは何よりもラテン語を話す能力を養うためのものであり、ドイツにおいても後に行われた「学校劇」(Schuldrama) もその主たる目的は同じであった。しかしヴィンプフェリングの意図は語学能力の育成よりも、むしろ道徳的諷刺にあり、そこにまたこの喜劇の一つの意義があったといえる。注目してよいのは物語の素速い進展であり、僧侶の無知、聖職録の貪欲な積立てに対する批判、ローマ教皇庁の乱脈や不道徳の剔抉等次々と不正が暴かれ、教皇や枢機卿もその鋭い批評の目から逃れることはできない。一方彼本来の主張である学問、特に哲学の奨励が二人の対話を通じて展開される。特に喜劇的に勝れているのはシュテュルフォーの受けるラテン語の試験の場面であり、彼のラテン語の初歩的な誤りが人々の笑いの対象となる。この場面は後に続く喜劇の一つの型をなしている。それらの長所にも拘わらず、その諷刺は時代悪に対してはそれほどの効果をあげ得なかった。本格的なラテン語の喜劇は後のロイヒリーン (Johann Reuchlin) の「ヘンノー」Henno などを待たなければならなかったけれども、それらを生む一つの段階にはなったといえる。

「ヴィンプフェリングのヒューマニストとしての生成と発展は第一期のハイデルベルク時代とともにその終結に達した。」その後も倫理的学問的にも厳しい自己鍛練が続けられたけれども、年とともに頑固な保守的性格が目立っていった。一四八三年春、ハイデルベルクにペストが流行し、ヴィンプフェリングは一時その難を逃れるために故郷に帰った。

三　シュパイアー時代

一四八三年故郷のシュレットシュタトに帰ったヴィンプフェリングは、妹のマクダレーナの結婚式に列席し、暫く故郷に滞在し、六ヶ月後に再びハイデルベルクに戻った。しかし教壇には立たなかった。というのは半ば副業的とも思えるシュパイアーの司教座聖堂の説教師の役を引き受けたからである。同僚で、親しく付き合っていた神学者のアンドレーアス・プファート・フォン・ブラームバッハ（Andreas Pfad von Brambach）がシュパイアーの司教ルードヴィヒに彼を推薦したのである。彼は余り乗り気ではなかった。慣れない職務に耐えられるかどうか不安であったし、健康にも自信がなかった。彼の細い声がシュパイアーの説教壇に適しているかどうかも疑問であった。それにそもそも何故彼がアカデミックな教育を止めたのかもはっきりしない。大学の活動と青年の教育にこそ自分の使命があることを彼自身まだ自覚していなかったのであろうか。あるいは彼が故郷に去っている間にハイデルベルク大学の事情も変り、学長にまで登りつめた彼にとって落ち着く場所がなかったのかもしれない。また別に次のような事情も手伝っていた。というのはその説教師の席には競争者がいて、ヴィンプフェリングがある僧侶の私生児であるという悪意のある噂を流したのである。こうした中傷によって他人を陥れることは当時は珍らしいことではなかったようだ。彼は母親の名誉のためにもその職を引き受けざるを得なかった。あるいはすべては友人ブラームバッハの好意から出た配慮だったのかもしれない。その説教師の仕事も公けには行われなかったらしいし、それも短期間で罷めてしまった。実活動のない職務は彼の主張からも心苦しかったのではないかという考えは好意的に過ぎるであろうか。

とにかく彼はシュパイアーに長く留まる気はしなかったが、実際には一四八四年から一四九八年までの一四年間をこ

のライン河畔の町で過ごすことになった。ハイデルベルク大学への思いは彼の頭を去ることがなかった。機会があればネッカルの学術の都に帰りたかった。「大学の外には生活はない」という彼のことばがそれを証明している。事実またその誘いがなかったわけではない。一四九五年にはハイデルベルクにツェルティス（Konrad Celtis）を中心とした「ライン文学協会」（Rheinische Litterarische Gesellschaft）というヒューマニストの集まりがあり、ヴィンプフェリングもその会に誘われたのであった。そのサークルにはロイヒリーンやルードルフ・アグリコラ（Rudolf Agricola）も加わり、プファルツ誠実伯の愛顧を受けていた。勧誘したのはツェルティスばかりでなく友人で法律家のヴァッカー（Vigilius Joh. Wacker）もいた。ヴィンプフェリングとツェルティスが個人的に知り合っていたかどうかは分からないがお互いに関心を持っていたことは事実であろう。。しかしヴィンプフェリングは健康上の理由からそれを断った。しかし翌年にはヴァッカーと共にかなり長い旅をしているのでそれが本当の理由かどうかは分らない。似たような勧めをその後も彼はしばしば断っているところをみると、それは彼の性格から来ているのかもしれない。「私はナイチンゲールの中にあっては鴉だし、鷹の中にあっては梟にすぎない」と言い、幸運の女神が微笑まないと歎いている。彼は他の仲間と同列でしかない場合には思想を同じくする仲間に加わることを避けていた。彼は一四九七年に死んだダールベルクの周囲に集まったハイデルベルクのサークルに於て彼が演じた役割が彼に与えられないであろうということを知っていた。彼は少くとも「仲間の長」（primus enter pares）と認められ、有名人に対してあるグループの代表者として立ち向かうときだけ心地よく感じた。シュトラースブルクにエラスムスを迎えたことなどがそのよい例である。

一四九六年春、前述のように彼は友人のヴァッカーと旅に出た。シュポーンハイム伯爵領にいるベネディクト派の修道院長ヨハネス・トリテーミウス（Johannes Tritemius）を訪問するのが目的であった。始めツュルティスを誘ったが

今度は逆に断わられた。先ずフランクフルトの書籍市に立ち寄り、そこで三日間本を買い漁った。余り夢中だったので本屋と思い間違えられる程であったという。それからマインツに行き、ディートリヒ・グレーゼムント（Dietrich Gresemund）を訪れ、更にラインを下ってシュポーンハイムに行き、復活祭を祝って一週間休んだ。そこでトリテーミウスのギリシア語の蔵書に驚嘆の目を瞠り、滞在は瞬く間に過ぎてしまった。「修道院長はギリシア風であった。僧侶たちもギリシア風であった。いやそれどころか犬も石も木々も、修道院全体も――何もかもギリシア語に包まれていた。まるでイオニアの地の真只中にいるような気持であった。」と語っている。旅行は更に続けられ、ビンゲン、バッハラッハ、コーブレンツを過ぎ、オッペンハイムを通って帰った。

一四九六年二月九日ヴィンプフェリングは神学得業士の学位を授与され、司教座聖堂参事会員フィーリプ・フォン・ローゼンベルク（Philipp von Rosenberg）――彼は後にルードヴィヒの跡を継いでシュパイアーの司教になった――の家で親しい人たちに囲まれて祝福を受けた。また当時ヴィンプフェリングの借りていた家は多くのヒューマニストたちの一種のサロンになり、彼にとっては幸せな時代であった。また実際実り多い時期でもあった。彼の活動も多方面に及んでいる。文学やそれに関連した問題、教会の風紀と一般の治安、政治問題、或いは私的な事柄等、関心も多岐に亘っている。勿論短気のために多くの敵を呼ぶこともあった。しかしそうした刺激も彼の勇気を振い立たせるためにある程度必要でもあったのかもしれない。その頃、時代の野蛮なさまざまの行為に対して戦う高貴な人間、また教会に忠実なキリスト教徒、偉大な教育者としてのヴィンプフェリングの一面が現われて来る。彼の思想と意欲の中には、昔の敬虔な時代に返そうとする改革ではあったけれども、不安な世情を建て直そうとする改革の意欲が漲っていた。そうした自己の道を進んでゆくうちに師のガイラー・フォン・カイザースベルクに近づき、再び親交を深めていった。

一四八四年一月一二日のジクストゥス四世（Sixtus IV）の死に当たって人間としての教皇を徹底的に批判した詩がある。それは忠実なカトリック教徒であるが故の発言であるが、余りの激しさのために自分でも公開を憚かった程である。教会改革への熱意とともに後年の特徴である忠告、警告、戒告の発言が強くなり、志を同じくする仲間たちの発言を積極的に支持した。特にガイラーの教会の弊害についての大胆な発言は有名で、その「説教集」がシュトラースブルクのペーター・アッテンドルン（Peter Attendorn）のもとで出版された。ヴィンプフェリングは僧侶の誰もがこの説教を読み、司教の権威を笠に着て横暴な振舞いをする傀儡どもに如何に対処すべきかを知って欲しいと思った。彼はまたアッテンドルフがその「説教集」の中にヨドークス・ガルス（Jodokus Gallus）のスピーチも取り入れたことを喜んだ。この同郷の友人はシュパイアーの宗教会議の演説で僧侶階級の不正と無知を完膚無きまでに批判したのであった。あるいはヴィンプフェリングは二人の先輩と友人の「説教集」の編集に協力をしたのかもしれない。また同じ出版社から出されたある主任司祭の苦悩と不安を扱った小冊子があるが、率直な言葉と、ペダンチックではあるが、ユーモアと真面目を混じえた問題の扱い方はヴィンプフェリングの文体を思わせるものがあり、あるいは彼の作品ではないかといわれている。

彼はまた宗教会議を重視した。つまり大小の宗教会議を定期的に、或いは臨時に開催し、僧侶や教会の問題をそこで討議すべきであるとしたのである。彼は様々の問題の処理を各教会や個人の僧侶の自由に任せて置くことから色々な弊害や不正が生ずると考えたのであろう。衆知を集め討議することによって新しい方法や改革の方向を見出そうとする彼の考え方の中に漠然とではあるが新しい時代への模索がなかったとはいえない。一四九七年五月二二日に当時ヴォルムスに滞在していたマインツの大司教ベルトルト・フォン・ハンネベルク（Berthold von Hanneberg）に宛てて、教会

の紀律についての問題を扱ったガイラーの文書を送り、出来るだけ早い時期に司教たちを招集し、教会の健全な改革を討議するように進言している。既に四年前にもシュパイアーで演説し、修道院長に対しても不適当な寛大な処置を取らないこと、僧侶階級の不正に対しては厳しい態度で臨むべきこと、偽善偽信のパリサイ主義に対しては徹底的に戦うべきことを主張し、この主張は生涯に亘って貫かれた。しかしそれらの主張も具体的な成果は収め得なかった。そこに彼の限界があったということもできるであろうが、周囲の事情を見れば宿命であったともいえる。

熱烈なマリヤ崇拝も彼の大きな特徴の一つである。「天使祝詞」De nuntio angelico も熱烈なマリヤ讃歌であるが見窄らしい厩のキリストを描いた部分は感動を誘い、勝れている。序文で彼は彼の支持者であり、信頼を寄せていた司教座聖堂参事会々長ゲオルク・フォン・ゲミンゲン（Georg von Gemmingen）にあてて異教文学とキリスト教文学について彼の意見を述べている。古典古代の偉大な精神を尊敬するにしてもキリスト者によって書かれた著述も決して軽視してはならないこと。神を信ぜず自己認識もない知識は空しい誤った知識であること。また神についての学問はキリスト教の書物から、自己自身についての学問は哲学から学ぶべきであるとしている。特に若いときに神学を疎かにしたために後に激しく後悔した多くの法律家たちのいることを指摘しているのは彼の経験から得に一つの傾向であろうか。聖母崇拝に関連してすべてのエルザス人にとって忘れられないのはマリヤの無垢懐妊のドグマである。このドグマは様々の事件や論争の元になったものであるが、ヴィンプフェリングの堅い信念はマインツの大司教に捧げた一四九二年の長詩「マリアの三重の後光」De triplici candore Mariae にはっきりと現われている。この詩は親しい人々の間にだけ配られたものであったが評判が良かったので、友人たちの讃辞を添えて次の年に出版された。こうしたヴィンプフェリングの立場は当然反対派との激しい論戦に発展して行った。特にドミニコ会士ヴィーガント・ヴィルト（Wigand Wirt）と

の争いは後々まで尾を引くことになる。マリヤ崇拝の実践要領としてはシュパイアー司教の要請で「聖母小聖務日課」とシュトラースブルク司教アルベルトの依頼により「聖ヨセフの小聖務日課」がヴィンプフェリングによって起草された。またこれに関連して「シュパイアー司教座聖堂讃歌」が作られたが、聖堂の構造から僧侶の生活、祭礼、布教活動、教育の問題などが多くの場を占め、純粋な詩の構成が著しく妨げられている。ここでも教会の弊害が取り上げられ、全体は教会の庇護者マリヤの讃美によって終っている。彼がいくら激しく非難したとはいえ、彼が教会や僧侶そのものを否定したのでないことは明らかである。彼はガイラーとともに生涯に亘って教会と僧侶の権利を擁護し、特に当時腐敗した貴族に対しては恐れず堂々とその良心に訴え、自己の意見を主張した。それは就任したばかりの教皇アレクサンダー六世（Alexander VI.）に向けられた「僧侶階級の迫害に対する訴え」と「教会の権利と僧侶の弁護」によく現われている。日頃の主張とは裏腹に聖職者の優先と特権とが強調されているのが二著の共通点である。特に僧侶の職業を聖職と見做し、世俗の職業上の上位に置き、皇帝でさえも僧侶には一目置くべきであるとし、僧侶なくしては国家は存在しないとまで主張する。したがって彼らに様々な負担を掛けること、特に重税を課することに反対する。これらの主張は彼が忠実なキリスト教徒であることを証明するものであろうか、それとも彼もまた権威に対しては弱かったことを証明するものであろうか。

さて目を政治や社会の問題に向けてみると、そこにヴィンプフェリングの一つの大きな特徴が見えてくる。彼は教会と信仰を愛したように祖国とドイツ国民を熱狂的に愛した愛国者、否国粋主義者と見做すことすらできる。これはヴィンプフェリング自身、あるいはエルザス人、更にドイツ・フマニスムスの大きな特質といえるかもしれない。フランスのシャルル八世（Charles VIII.）は、彼の王妃になるためにフランスの宮廷で花嫁修業をしていた皇帝マクシミーリア

ンの王女マルガレータ（Margareta）を父親の許に送り返し、更にその上陰謀によってマクシミーリアンの許嫁であったアンヌ・ド・ブリュターニュ（Anne de Bretagne）を王妃に迎えた。当時ドイツではこの恥辱に抗議するパンフレットが数多く発行された。皇帝と帝国の名誉のためにこの論戦の先頭に立ったのがヴィンプフェリングであった。彼はフランスの騎士団長であり外交官であったロベール・ガガン（Robert Gaguin）を論敵として書簡を取り交した。その往復書簡はヴィンプフェリングのラテン語の詩が大部分を占め、またそれを一般市民に分り易くするためにドイツ語に翻訳した。それはサッポー詩節によったもので「バラは枯れる」というリフレインのある詩であるが、民衆を憤激させるほどの力はなかった。伝統的な文学形式や韻律を用いたラテン語の詩は一部学者の間にしか読まれなかったし、ドイツ訳も苦心の跡は伺えるが民衆を動かす力に乏しかった。

さてシュパイアー時代のヴィンプフェリングにとって次に重要なのは教育上の分野の仕事である。この事に関しては稿を改めて論じたい。

（未完）

拙稿は次の著書を祖述要約したものであることをお断りしておく。

Joseph Knepper: Jakob Wimppeling (1450—1528). Sein Leben and seine Werke. Nieuwkoop B. de Graaf 1965

なお次の諸著からも多くの示唆を得た。

Richard Newald: Probleme und Gestalten des deutschen Humanismus. Walter de Gruyter & Co., Berlin 30 1963

Hans Rupprich: Uom späten Mittelalter bis zum Barock. (De Boor/Newald: Gerchichte der deutrchen Literatur Band IV/$_1$) G. H. Beek'scche Verlagsbuchhandlung. München 1970

Wolfgang Stammler; Von der Mystik zum Basock 1400—1600. T. B. Metzlessche Verlagsbuchhandlung Stuttgart 1950

Willy Andreas: Deutschland vor der Reformation. Deutsche Verrags-Ansttalt Stuttgart 1948
Jakob Wimpfeling: Stylpo. Lateinisch/Deutsch (Universal-Bibliothek Nr. 7952) Philipp Reclam Jun. Stuttgart 1971